

Title	国際理解教育をめざした英語授業における絵本の活用 (共同研究報告 : 英語一貫教育研究)
Author(s)	斎藤, 薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 17
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2337
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

人文学部教授坂本ひとみ先生が、上記テーマにて発表された。参加者は18名。発表の概要は以下の通りである。

まず、授業への導入が近いとされている小学校の英語について、1992年からの流れを紹介した上で、「英単語や文法を子どもの頭にたたきこむ語学教育であってはいけない」と説き、むしろ英語を「世界への扉」ととらえた授業を提唱する。「小学校に英語活動が入ることで、今の日本の小学校教育全体がよりよい方向に変革される可能性を追求したい」という坂本氏は、その方法として、総合学習と英語学習を結びつけたプロジェクト・ワークが望ましいという。「子どもが、自ら企画した課題に向って、グループで協働作業をしながら、調べ、学びを深め、自分なりのオリジナルな発表方法を考え、プレゼンテーションをしていく」というプロジェクト・ワークのスタイルこそ、子どもの英語学習にとって有効だという。

絵本を使うのは、そのプロジェクト・ワークのきっかけになるからである。ただ単に絵本を読み聞かせるのではなく、絵本を通じて知らなかった世界に親しみ、理解させる。たとえば、アメリカ先住民をテーマにした紙芝居を読む前に、伝統的衣装を身に付けた先住民の写真を見せたりグッズを見せたりすることにより、紙芝居の内容がより理解しやすくなり、登場する先住民への親近感も湧き、理解しようという気持ちが生まれる。相手を理解したいと思う気持ちがわかれば、「聞いてみたい事」も頭にかび、英語を学びたいという意欲もわく。

英語教育に国際理解教育を絡めようとする、現場の先生方からは「難しい。子どもには理解できない」という声上がる事も多いそうだが、実際に工夫された授業には、子供たちは目を輝かせてついて来るそうだ。

また、坂本氏は小学校の英語教育は、中・高のみならず、大学までも含めた連携的なカリキュラムの中で行われるべきだとも話し、小学校教諭以外の参加者にも、とても興味深い講演であった。

(文責：斎藤薫 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程)

(2009年10月19日、聖学院本部新館2階)

【英語一貫教育研究】
国際理解教育をめざした英語授業に
おける絵本の活用

2009年度第3回「英語教育研究会」が、10月19日、
聖学院本部新館において開催され、東洋学園大学